

頻度高い「熱性けいれん」

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 23 》

主に生後6カ月から5歳までの乳幼児が38度以上の発熱に伴ってけいれんを起こす「熱性けいれん」。子どもの急変に驚いた保護者が救急車を呼ぶケースが多く、県立中央病院に救急搬送される乳幼児の約8割を占める。ほとんどの場合、経過・予後は良好だが、髄膜炎や急性脳炎・脳症などの重症な中枢神経疾患との鑑別が重要だ。

県立中央病院では正確な鑑別を行うために、血液、髄液検査、CT（コンピュータ断層撮影）、頭部MRI（磁気共鳴画像装置）、脳波検査などを実施している。急性脳



駒井 孝行
小児科科長

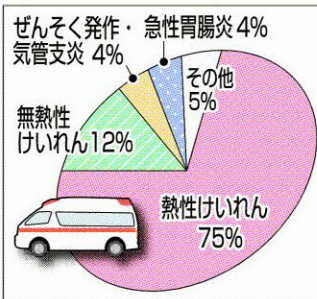
重症疾患との鑑別が重要

炎・脳症など重症疾患の疑いがある場合は、集中治療室（ICU）で治療、管理する必要がある。

小児科科長の駒井孝行医師によると、熱性けいれんは100人に8人ほどが起こす非常に頻度の高い病態。詳しい原因は分かっていないが、発達過程の脳が発熱のストレスに弱いためと考えられている。

典型的な症状は手足の突っ張りやびくつきのほか、意識がなくなったり、顔色が悪く白目になったりする。けいれん発作は通常2〜3分で治ま

県立中央病院に
救急車で小児科入院する
疾患の内訳（2010年度）



るが、15分以上続いたり、短時間に何回も繰り返したりする場合は要注意だ。髄膜炎はけいれん発作のほかに、頭痛や嘔吐を伴うのが特徴。急性脳炎・脳症はけいれんや意識障害が長引くことが多い。

熱性けいれんに対する家庭での対処法として、駒井医師は「口に物を入れると吐き気が増したり、舌が喉の奥に落ちて窒息したりする危険性もある」と注意を呼び掛ける。吐いた物が肺に入ることを防ぐため、静かに横向きに寝かせて発作が治まるのを待つのが望ましいという。

「わが子が急にけいれん発作を起こすと親は大変驚くが、できれば落ち着いて10分ほど子どもの状態を観察してほしい」と駒井医師。けいれんが10分以上続くときは迷わず救急受診を。熱が出るたびにけいれんを繰り返す子どももあり、「けいれん予防の座薬を常備するなど、かかりつけ医と対応法を話し合っておくことが大切」と話している。|| 第2、4木曜日に掲載します